

信州型自然保育研修会における短期大学の役割

－「信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト
～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～」事業を通して－

酒井真由子

1. 問題設定

本報告の課題は、「信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～」事業を記述・整理することを通して、信州型自然保育研修会を実施していく上での短期大学の役割を考察するものである。

長野県では、平成27年4月に「信州型自然保育認定制度」を創設した。自然保育とは、「信州の豊かな自然環境と多様な地域資源を活用した、屋外を中心とする様々な体験活動を積極的に取り入れる保育・幼児教育」（長野県2016）のことを指すが、この自然保育という言葉は、「信州型自然保育認定制度」の検討途上で作られた造語である（山口2016）。長野県では、上記のような「自然保育」を行っている団体に対し、県が定めた基準を満たした場合に「認定」を行う制度として、「信州型自然保育認定制度」を創設したのである。

「信州型自然保育認定制度 認定基準（平成27年4月1日施行）」には、保育及び自然体験活動の質の担保のために、「申請日以前の2年間に、自然保育を行う上で有効であると考えられる外部の研修等の場に参加した常勤の保育者がいること」と記されており、「認定」を受ける以前に保育者が外部研修に参加しておく必要がある。「認定」を受けた後も、県が主催する研修会や自然保育関連事業等の参加に努めることが求められている。そこで、本学では平成28年度より、「信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～」事業¹の一環として、「やまほいく研修会」を企画・実施してきた。平成28年度には、「やまほいく研修会」を4回開催し、長野県内外から多くの保育者や保護者、子どもが参加している。

ところで、自然保育関連の研修会は、本学だけでなく、自治体や野外活動・野外教育を行っている団体等でも実施している。長野県は、認定園数を増やす方針であるため、自然保育関連の研修会はこれまで以上に増えていくことが予想される。実際、自然豊かな長野県では「信州型自然保育認定制度」の創設前から自然体験活動や自然体験

のイベントを実施している団体があちこちにある²。

そこで、保育者養成校であり研究機関でもある本学が、今後、自然保育の研修会の実施も含め、自然保育にどうかかわっていくかを検討していく必要がある。本稿では、平成28年度の事業「信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～」について報告するとともに、本学における「やまほいく研修会」の在り方を検討することを目指す。

2. 長野県主催の「信州やまほいく（信州型自然保育）研修交流会」

本学における「やまほいく研修会」について報告する前に、長野県が主催する「信州やまほいく（信州型自然保育）研修交流会」（以後、「信州やまほいく研修交流会」）について概観しておきたい。表1は、平成28年度の「信州やまほいく研修交流会」を一覧にしたものである。

長野県主催の「信州やまほいく研交流会」は、平成28年度には4回実施している。いずれも対象は信州型自然保育認定園及び今後認定を希望する園の職員等であるが、参加人数に余裕がある場合には保護者や小学校関係者も参加可能である。

次に、開催日と開催場所である。第1回目は平成28年10月2日(日)に松本あがたの森文化会館(松本市)、第2回目は平成28年12月10日(土)に駒ヶ根市役所の会議室と駒ヶ根市十二天の森(駒ヶ根市)、第3回目は平成29年2月18日(土)に上田女子短期大学(上田市)、第4回目は平成29年2月23日(木)に長野市生涯学習センター(長野市)で開催されている。「信州やまほいく研修交流会」が中信である松本市、南信の駒ヶ根市、東信の上田市、北信の長野市で開催されていることから、長野県全域に渡って自然保育研修会を開催することで、長野県全体に自然保育の普及を目指そうとする県の姿勢がみられる³。

では、平成28年度はどのような内容の研修を実施したのか。第1回目は「安全のモノサシ 危険のモノサシ」「保育資源としての『環境』を考える」「育ち」「遊び・行事」「食・はたけ・たんぼ」「命と出会う いのちと向き合う」という6つテーマを掲げてグループを作り、司会進行を務める講師のもと、グループディスカッションをしている。講師は、長野県野外保育連盟に加入している野外保育団体やいわゆる「森のようちえん」の実践者である。

第2回目と第3回目は、「自然保育のイメージを考える」というテーマで座学とグループディスカッションを行っている。また、屋外にて、①冬の遊び方や遊べる素材の抽出、②安全管理の考え方と危険予知トレーニング、の実技・座学を実施している。

講師は、第2回目は信州外遊びネットワーク副代表の鈴木道郎氏、第3回目は信州外遊びネットワーク代表の田口眞嗣氏である。第2回目と第3回目は、同様のテーマと形式でもって会場と時期を変えて実施している。

第4回目は、「発達が気になる子どもの自然との関わり方」というテーマで、信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部部长・診療教授の本田秀夫氏による講演会である。講師は医学の専門家ということで、医学の知見から子どもと自然保育について学ぶことができる。午後は、参加者同士の情報交換・交流会、全体での振り返り・質疑の時間が設けられている。

表1 長野県主催の「信州やまほいく研修交流会」(平成28年度)

回	日にち	場 所	講 師	テーマ・内容・形式
第1回	平成28年 10月2日(日)	松本あがたの森 文化会館	本城 慎之介氏 (森のようちえん びっぴ) 名取 あゆみ氏 (野外保育森のいえ ぼっち) 神澤 真江氏 (里山保育 ひなたぼっこ) 内保 亘氏 (森のようちえん ちいろば) 江藤 智子氏 (野外保育 森の子) 小林 成親氏 (山の遊び舎 はらべこ)	○グループディスカッション 「安全のモノサシ 危険のモノサシ」 「保育資源としての 『環境』を考える」 「育ち」 「遊び・行事」 「食・はたけ・たんぼ」 「命と出会う いのちと向き合う」
第2回	平成28年 12月10日(土)	駒ヶ根市役所南庁舎 大会議室 駒ヶ根市十二天の森	鈴木 道郎氏 (信州外遊びネットワーク副代表)	○座学・グループディスカッション 「自然保育のイメージを考える」 ○実技・座学 ①冬の遊び方や遊べる素材の抽出 ②安全管理の考え方と危険予知ト レーニング
第3回	平成29年 2月18日(土)	上田女子短期大学	田口 眞嗣氏 (信州外遊びネットワーク代表)	○座学・グループディスカッション 「自然保育のイメージを考える」 ○実技・座学 ①冬の遊び方や遊べる素材の抽出 ②安全管理の考え方と危険予知ト レーニング
第4回	平成29年 2月23日(木)	長野市 生涯学習センター	本田 秀夫氏 (信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部部长・診療教授、 精神科医師、医学博士)	○講演 「発達に気になる子どもの 自然との関わり方」 ○情報交換・交流会

各回には、講師による講義や講演、参加者が自然体験をする実技だけではなく、参加者が自身の考えを述べたり、他の保育者の意見を聞いたりすることのできるグループディスカッションや情報交換会が用意されている。つまり、平成28年度の長野県主

催の「信州やまほいく研修交流会」の特徴としては、理論と実践がセットになった研修であること、そして参加者同士が意見交換を通して交流することを重視していること、と言えそうである。

3. 信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト ～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～事業

(1)事業の目的

それでは、本学の「信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～」(以後、「やまほいくの里山」プロジェクト)について概観していこう。「やまほいくの里山」プロジェクトは、長野県の平成28年度大学・地域連携事業補助金事業に採択され、実施することができた事業である。

「やまほいくの里山」プロジェクトの目的は、信州やまほいく(信州型自然保育)の普及及び自然保育を取り入れた子育て環境の充実を図るとともに、信州やまほいく(信州型自然保育)の研修プログラムの構築を目指すことである。

上田女子短期大学には、自然豊かな「裏山」と信州型自然保育認定園である上田女子短期大学附属幼稚園が隣接している。その利点を生かし、「やまほいくの里山」プロジェクトは裏山と附属園をフィールドとして、自然保育や野外教育の専門家や自治体と連携しながら、地域の保育者や教師、保護者向けに信州やまほいく(信州型自然保育)の研修を行うことをメインにした。しかし、「やまほいくの里山」プロジェクトを計画していた当初は「保育者や教師向けの研修会を開いたとして、果たして参加者が集まるかどうか」という不安があった。というのも、「信州型自然保育認定制度」が始まったばかりであり、研修会に関する動向が見えなかったからである。忙しい保育者が果たして週末の研修会に来るのかも分からなかった。

そこで、親子で参加できる内容にして、親子の自然体験活動の普及にも努めることにした。また、保育者が研修に参加するとすると、自身の子どもを預けなければならない保育者もいるであろう。そこで、保育者が自身の子どもと一緒に参加できるようにした。子どもが参加することで、保育者や保護者は、自然に関わる子どもの姿を実際に目にすることができるため、保育者や保護者にとっても、そしてボランティアとして参加する学生にとっても自然保育への理解が深まると考えた。

(2)事業の内容

「やまほいくの里山」プロジェクト」では、先に上げた目的をふまえ、4つの事業内容を計画した(表2)。

表2 「信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト
～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～」事業内容

1	保育者を対象とした信州やまほいく（信州型自然保育）研修会の開催	「やまほいく 研修会」
2	親子を対象とした自然遊びの機会の提供	
3	現場の保育者による事例発表の機会（シンポジウム）の提供	
4	研修プログラムの内容や方法の検討	

一つ目は、本事業のメインである保育者や教師のための信州やまほいく（信州型自然保育）研修会（以後、「やまほいく研修会」）の開催である。上田女子短期大学の裏山において、年に4回、自然保育や野外教育の専門家を講師として招き、地域の保育者や小学校、特別支援学校の教師などが自然保育を実践していくための、子どもの育ちと自然を結びつけた活動や技術を学ぶ研修である。

二つ目は、親子のための自然遊びの機会の提供である。「やまほいく研修会」には積極的に親子の参加も募り、研修を受ける保育者等と共に、保護者とその子どもも自然の中で思い切り遊び、自然とふれあえるようにする。研修会における語り合いの場に保護者も（場合によっては子どもも）参加できるようにする。

三つ目は、保育者が自然保育を行う上で有効であると考えられる事例を発表し、学び合うための機会を創設し提供することである。「信州型自然保育認定制度 認定基準」には、「申請以前の2年間に、自然保育を行う上で有効であると考えられる研究保育や対外的な事例発表等を行った常勤の保育者がいること」（平成27年4月1日施行）と定められているように、認定園の保育者は事例発表をすることが求められている。しかし、現場の保育者が対外的に自身の園の実践を報告する機会はそう頻繁にあるわけではない。そこで、現場の保育者によるシンポジウム等を開催することとした。

四つ目は、本学における「やまほいく研修会」が、長野県の信州型自然保育認定制度の基準に合致した研修として指定を受け、平成29年度以降も信州やまほいく（信州型自然保育）の研修を継続するために、研修プログラムの内容や方法を検討・整備し、「やまほいく研修会」のプログラムを構築していくことである。また、本学における「やま

ほいく研修会」にとどまらず、短期大学として自然保育の研修会の内容等を対外的に発信していくためにも、研修プログラムの内容や方法の検討は必須であろう。

(3)事業計画の背景

上記四つの事業内容を計画した背景には、いうまでもなく、「信州型自然保育認定制度」の創設がある。

ところで、自然を取り入れた保育は今に始まったことではない。これまでも、幼稚園や保育園の多くは、自然を取り入れた活動を行ったり、環境を構成したりしてきた。特に、園の周囲に自然が乏しい園こそ、そのような環境の中で、いかに子どもたちが自然と触れ合えるようにするかを工夫している。一方で、身近な自然をどのように扱い、どのように取り入れていけばよいのかわからない、もしくは自然物を使った活動がマンネリ化している、といった課題を抱える保育者も少なくない。このような課題を抱えた保育者は、ちょっとしたスキルやアイデアを得ることで、より豊かな保育実践につなげていくことができる。

また、子育て家族の中には、子どもの自然体験の不足を感じていたり、自然の中の遊び体験を求めているりする保護者も多い。しかし、自然のなかで遊んだ経験の少ない保護者の増加や子どもを取り巻く環境の変化などから、親子が気軽に自然のなかで遊ぶことが難しくなっている。

そこで、長野県内において、信州やまほいく(信州型自然保育)の研修及び事例発表の機会を設定すること、そして保護者とその子どもが気軽に自然体験できる場を設けることが喫緊の課題であると考えた。

(4)「やまほいく研修会」の成果目標と評価方法

「やまほいく研修会」では、各回、参加者数40名(内、子どもの参加者数10名)を目標とした。また、研修会において、参加者一人ひとりが主体的に参加すること、満足感を得ること、普段の保育や子育てのなかで活用できるようなヒントを得ることを目標とした。研修会ごとに参加者数や満足度を評価し、研修プログラムの内容と方法を検討するため、参加者、講師、学生スタッフにアンケート調査を行うこととした。

4.「やまほいく研修会」実施内容

(1)「やまほいく研修会」の概要

それでは、「やまほいくの里山」プロジェクト事業のうち、「やまほいく研修会」について詳しくみていこう。表3は、上田女子短期大学における平成28年度「やまほいく研修会」を一覧にしたものである。

表3 上田女子短期大学における「やまほいく研修会」（平成28年度）

回	日 時	講 師	テーマ・形式	内 容	参加者数
第1回	平成28年 7月31日(日) 10:00～12:30	信州大学教育学部講師 瀧 直也先生	○実技 「夏の裏山で遊ぼう」～か まどを使ってバウムクーヘ ンを焼こう！～	一斗缶かまど制作、火 熾し、バウムクーヘン 作り、会食	大人27名／子ども19名 学生ボランティア 上田10名／信大3名
第2回	平成28年 10月30日(日) 10:00～12:00	上田女子短期大学教授 笹井 弘先生	○実技 「秋の裏山で遊ぼう」 ～松かさば未来のえねる ギー？～	松かさの観察、 「でたでた」の制作	大人24名／子ども9名 学生ボランティア 上田9名／信大2名
第3回	平成28年 12月4日(日) 10:00～12:00	信州外あそびネット ワーク副代表／キャン パスビレッジ代表 鈴木 道郎氏	○実技 「冬の裏山で作ろう」 ～秘密基地を作ろう！～	やき芋の準備、基地づ くり、基地遊び、やき 芋＆マッシュマロB.B.Q	大人34名／子ども25名 学生ボランティア 上田9名／信大5名
第4回	平成29年 3月25日(土) 10:00～15:30	NPO法人響育の山里 くじら雲代表兼保育者 依田 敬子氏 NPO法人山の遊び舎 はらべこ保育者 小林 成親氏	○実技、ワークショップ 「春の裏山で探ろう語ろう」 ～裏山を歩き、子どもの気 づきに大人がどう寄り添う かを考える！～	絵本の読み聞かせ、わ らべうた、ルーベと 袋を持って裏山を歩 く、調理(りんごのク ランチ)、会食、ワー クショップ	大人11名／子ども7名 学生ボランティア 上田15名／信大2名

まずは「やまほいく研修会」の実施回数と時期である。日本の保育・幼児教育では、四季を大切にしている。そこで、春夏秋冬を基本軸として、研修会を組み立てた。その結果、平成28年度は夏研修からスタートし、続いて秋研修、冬研修、そして春研修で締めくくるという4回の研修となった。

対象者は、保育者、教師、親子とした。保育者が研修会に参加しやすくするために、保育者自身の子どもも一緒に参加できるようにした。子どもが参加することで、保育者や保護者が、子どもが活動する姿を観察することができ、その分、子ども理解が深まる。

さて、「やまほいく研修会」の目的の一つは、保育者、教師、保護者が自然体験活動するためのスキルや自然に関する知識を身に付けることである。もう一つの目的は、参加者自身が生き生きと自然体験活動をすることである。参加者自身が自然を取り入れた活動を楽しみ、満足感を得ることこそ、次の日からの豊かな保育や子育てにつな

がるからだ。さらに、本学にとっての重要な目的として、本学の学生が「やまほいく研修会」にボランティアとして参加することを通して、自然保育における知識とスキルを身に付けることはもちろん、様々な参加者と交流し、多様な考えを知り、自分の考えを他者に伝えていけるような自然保育の実践者になることが挙げられる。

そこで、専門家による講座を受動的に受けるのではなく、開放的な裏山の自然のなかで、様々な人と輪になり語り合う機会を設けるなど、参加者同士が交流できるような研修会を目指した。また、上田女子短期大学と信州大学教育学部の学生がボランティアとして参加することで、参加者、講師、学生が共に学び合い、語り合うことができるようにした。

主な活動場所は、本学の裏山である。ただし、ワークショップについては、教室を使用した。また、隣接している附属幼稚園を使用できるように、附属幼稚園の園長に許可を得ておいた。というのも、自然保育を実施する園のほとんどは、裏山を持たないからである。そこで、研修内容によっては附属幼稚園の園庭で実施することもあり得ると考えた。

次に研修のテーマである。まず、「やまほいく研修会」では、自然のなかで「遊ぶ」、「食べる」、「作る」、「語る」という要素を取り入れることにした。講師との内容の打ち合わせでは、四つの要素のうち一つは必ず取り入れるように内容を計画した。その結果、第1回目は「夏の裏山で遊ぼう～かまどを使ってバウムクーヘンを焼こう！～」、第2回目は「秋の裏山で遊ぼう～松かさは未来のえねるぎー？～」、第3回目は「冬の裏山で作ろう～秘密基地を作ろう！～」、第4回目は「春の裏山で探ろう・語ろう～裏山を歩き、子どもの気づきに大人がどう寄り添うかを考える！～」となった。講師は自然保育や野外教育、自然体験活動の専門家であると同時に、日ごろから保育、教育に携わっている方々である。「やまほいく研修会」では、野外体験を行うにとどまらず、保育・教育の根底にあるものを考え合う必要があると考えたためである。

では、次に、「やまほいく研修会」の各回の内容を簡単に確認していく。

(2)夏研修会「夏の裏山で遊ぼう～かまどを使ってバウムクーヘンを焼こう！～」

平成28年7月31日(日)に、信州大学教育学部の瀧直也先生により実施された。瀧先生には火焚きの体験活動を依頼した。また、簡単に手に入れることのできる一斗缶のかまどを作り、その一斗缶のかまどを使ってバウムクーヘンを焼き、会食するという活動であった。

夏の暑い日であったが、子どもたちは1時間もの間、一斗缶のかまどでバウムクーヘンを焼き続けており、子どもの熱中する姿に大人は驚いていた。火を扱った活動の重要性を感じた研修会であった。

(3)秋研修会「秋の裏山で遊ぼう～松かさは未来のえねるぎー?～」

平成28年10月30日(日)に、本学教授の笹井弘先生が講師となって実施した。松かさという自然物を使って製作することはもちろん、松かさの構造についての学習と野外で製作する体験を目的とした。

「松かさを水に濡らすとどうなるか?」といった松かさの構造の講義では、保育者から、松かさを濡らして保育室に置いておくだけでも子どもは面白がりそうだという声があった。松かさの構造を利用した「でたでた」の製作後、大人の作品と子どもの作品を並べて、参加者同士が作品を見合う時間を設け、みんなで作品を見合うことができた。

(4)冬研修会「冬の裏山で作ろう～秘密基地を作ろう!～」

平成28年12月4日(日)に、信州外あそびネットワーク副代表・キャンパーズヴィレッジ自然学校代表の鈴木道郎氏により実施された。

秘密基地を作る場所を探し、木の枝や葉っぱを拾ったり集めたりしながら基地を作っていった。鈴木氏より基地の作り方の説明はないが、鈴木氏が前日に作っておいた基地探しから始まったことで、鈴木氏の基地が見本になった。しかし、基地を作る場所も、基地に使用する枝や葉なども異なることから、どの基地も異なる形状、空間であった。

基地を作る場所を探すことで、裏山をじっくりと観察することにつながった。また、枝や葉、石などを拾うことで、子どもがよく行う採集という行為を見直すことができた。

(5)春研修会「春の裏山で探ろう・語ろう～裏山を歩き、子どもの気づきに大人がどう寄り添うかを考える!～」

春研修会は、平成29年3月25日(土)に、NPO法人響育の山里くじら雲代表兼保育者の依田敬子氏とNPO法人山の遊び舎はらぺこ保育者の小林成親氏により実施された。まずはルーペと紙袋を持って裏山を散策し、花や木などを観察したり拾ったりした。散策後は、りんごのクランチを作った。子どもも子ども用包丁でりんごの皮をむいたり、りんごを切ったりした。

午前中は、依田氏と小林氏と子どものやりとりを参加者と学生が見学する形式で進められたため、子どもの自然物への興味の持ち方、包丁の使い方、依田氏と小林氏の子どもへの関わり方を学ぶ機会になった。

春研修会では、午後にワークショップを実地した。前半は、依田氏と小林氏が自身の保育と指導計画に対する考えを紹介し、後半は全員で輪になり、午前中の活動の感想や、自然保育に対する疑問を述べ、意見交換をした。この日は長野県内の保育者、県外の保育者、小学校教師、保護者、上田女子短大と信州大学の学生が参加しており、多様な立場からの意見を聞きあうことができた。

5. 現場の保育者による事例発表の機会(シンポジウム)

現場の保育者による事例発表の機会としては、上田女子短期大学幼児教育学科公開講座2／リカレント教育講座において、平成28年12月17日(土)に、「こどもの学びと自然」というテーマでシンポジウムを実施した。本シンポジウムには、行政の立場から長野県県民文化部次世代サポート課の竹内延彦氏、私立幼稚園の立場から上田女子短期大学附属幼稚園の水野美恵園長、公立保育園の立場から水野辰也園長、学識経験者からは長野県短期大学准教授の山口美和先生が登壇し、司会は筆者が務めた。

長野県が平成27年度に信州型自然保育認定制度を創設したことを発端に、県内あらこちらで自然保育の研修会が行われるなど、自然保育への関心が高まっている。自然保育という言葉は響きのよい言葉であり、多くの人が「良い保育」としてその言葉を使っていくことが予想される。しかし、響きのよい言葉ほど、その言葉だけが独り歩きしてしまう危険性もある。そこで、本シンポジウムでは、なぜ「子どもの学びや育ちに自然が大切なのか」を問う内容にした。

また、本シンポジウムで目指したことの一つに、幼稚園、保育所、野外保育団体との間にある垣根を取り払うことが挙げられる。山口(2016:222)は、「信州型自然保育認定制度」の検討委員のあいだで、「認可／認可外、公的教育／私的教育という「境界線」によって分け隔てられてきた既存園と「森のようちえん」とが、同じ理念のもとで「認定制度」を創設していく議論の過程で、この「境界線」自体を問い直し、拡大していくような運動がおこった」ことを明らかにしている。本シンポジウムでは、参加者から「県、保育園、幼稚園、NPOという様々な立場からの話を聞くことができて世界が広がった」という声を聞くことができたが、それぞれの機関や団体間にあった垣根を取り払い、保育者、研究者、保護者、学生が共に子どもの育ちについて考える試みであったといえよう。

6. 本学教職員による野外保育団体への視察

本学が「やまほいく研修会」を実施し、自然保育について研究を進めていくために、本学教職員を対象とした野外保育所への視察を実施した。「信州型自然保育認定制度」は、当初認可外施設である「森のようちえん」等に対して県が積極的に支援することを目的として構想されており、検討委員会の保育関係者の委員はすべて野外保育団体の保育者や保護者であった(山口2016)。そこで「信州型自然保育認定制度」について理解を深めるには、野外保育所への視察が必要であると考え、平成28年10月17日にはNPO法人響育の山里くじら雲、平成29年3月2日にはNPO法人山の遊び舎はらべこの視察を実施した。

響育の山里くじら雲も山の遊び舎はらべこも、生活(暮らし)を重視した保育であった。畑で作物を作り、調理をし、散歩する。散歩しながら、子どもたちは食べることができる葉っぱをちぎって食べたり、虫の死骸に蟻がたかっているのを見つけたりする。みんなで一列になって歩くのではなく、それぞれが自分のペースで歩いていく。寄り道をしたり立ち止まったりする。目的地へ行くための手段としての散歩ではなく、散歩自体を十分に楽しむのだ。

この視察により、野外保育所での保育活動を知ることができたのはもちろん、保育理念と保育者の子どもへの関わり方について学ぶことができた。また、「やまほいく研修会」を実地する上での環境構成や道具や装具も参考になった。

自然保育とは、単に自然の中で活動し、自然物を使った活動を実施するにとどまらないことは、「やまほいく研修会」やシンポジウムを通して分かってきたことであるが、野外保育所への視察も、自然保育について考察を深める機会となった。

7. まとめ

本稿では「信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～」事業を記述・整理してきたが、これは今後の自然保育研修会を検討する材料となるものである。平成28年度については、本学では「“やまほいくの里山”プロジェクト」の他にも信州大学との大学間連携事業の学習会や幼児教育学科公開講座／リカレント教育講座で「自然保育」を扱ってきた⁴。これらについての報告は別に譲るとするが⁵、平成28年度は、いくつかの自然保育関連事業を実施し、長野県内外の保育者や保育・教育関係者と共に自然保育について考えることができた1年であった。何より、本学における自然体験活動事業は初の試みであったため、まずは専門家の力を拝借

しながら実践することを通して、本学教職員が自然体験活動に慣れていく必要があった。そういう意味では、平成28年度は今後の自然保育関連事業に向けての一步となったといえよう。

さて、現在、私立短期大学には地域に根ざした高等教育機関として、専門職業人材の養成機能、地域コミュニティの基盤となる人材の養成、地域基盤社会に対応した教養的要素を有する人材の養成、多様な生涯学習機会の提供が求められている(中央教育審議会2014)。そのことをふまえ、本学は長野県の私立短期大学として、教育(保育者養成)、研究、地域貢献という3つの観点から、自然保育に関わっていく必要がある。第一の教育(保育者養成)の観点では、学生が「やまほいく研修会」にボランティアとして参加することで、自然に関する知識や技術を身に付けることはもちろん、自然保育についての考察を深めること、保育者、保護者、子どもと関わる力が育まれることが期待される。また、本学は平成30年度より、自然保育コースを設置し、自然保育Ⅰ・Ⅱという科目を開講する。自然保育を通して、地域から求められる質の高い保育者の養成を目指していく。二つ目は、自然保育に関する研究を進め、その成果を発信・発表していくことである。自然保育の実践を裏付けることができるような知の構築も本学の役割の一つだろう。自然保育に関する研究を進めるにあたり、幼児教育学科と総合文化学科という二つの学科がある本学は、保育や教育だけでなく、多様な分野からのアプローチが可能である。三つ目は、地域貢献としての「やまほいく研修会」の実施である。保育者、教師、親子の自然体験活動と交流の機会を提供し、地域における自然保育への関心を高めていく。さらに、自然保育に関する知や研究成果について、「やまほいく研修会」等を通じて外部に発信していくことが本学の重要な使命であろう。

ところで、体験的な活動については、例えば「はいまわる体験主義」などと揶揄されることもある。自然保育が単なる自然のなかでの体験活動とならないためにも、そして一時のブームで終わらせないためにも、本学は、自然保育に関する研究を進めていく必要があると同時に、保育者養成や研修の場で、自然保育の研究成果を保育・教育現場の言葉で伝えていく必要があるだろう。

参考文献

井上美智子、無藤隆、神田浩行2010『むすんでみよう子どもと自然—保育現場での環境教育実践ガイド』北大路書房

長野県2015「信州型自然保育認定制度 認定基準(平成27年4月1日施行)」

長野県県民文化部次世代サポート課2016「信州やまほいく(信州型自然保育)普及のためのリーフレット」

中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ2014「短期大学の今後の在り方について(審議まとめ)」

山口美和2016「『森のようちえん』をめぐるポリテイク—「信州型自然保育」検討委員会の議事録分析を通して—」研究室紀要第42号、東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室

※本事業は、平成28年度大学・地域連携事業補助金事業「信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～」の助成を受けた。

-
- 1 「信州上田“やまほいくの里山”プロジェクト～上田女子短期大学の裏山で遊ぼう～」は、長野県の平成28年度大学・地域連携事業補助金事業に採択され、実施した。
 - 2 例えば、長野県には国や県の管轄である独立行政法人国立青少年教育振興機構国立信州高遠青少年自然の家、長野県望月少年自然の家、長野県阿南少年自然の家のほか、安藤百福記念自然体験活動指導者養成センター、NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター、NPO法人やまぼうし自然学校、信州外あそびネットワーク、キャンパーズヴィレッジ自然学校、長野県野外保育連盟、公益財団法人身体教育医学研究所などで、子どもや親子を対象とした自然体験活動や指導者を対象とした研修会を実施している。
 - 3 長野県は、県を4つの地域に分け、長野・飯山地方を北信、松本、大町、木曾地方を中信、上田、小諸、佐久地方を東信、諏訪、伊那、飯田地方を南信と呼ぶ。
 - 4 上田女子短期大学・信州大学大学間連携事業「第9回合同学習会」ニューイングランド大学上級講師スー・エリオット先生。上田女子短期大学幼児教育学科公開講座2／リカレント教育講座「第1回自然と環境」市東賢二先生。「第2回五感で知る信州の食文化～暮らしのなかで学ぶ、感じる「自然」と「季節の食」～」シニア野菜ソムリエKAORU氏。「第3回子どもの学びと自然」シンポジウム。なお、第3回については、本稿で紹介している。
 - 5 平成28年度の「自然保育」に関する事業等については「上田女子短期大学自然保育関連事業報告書（平成28年度）」にまとめてある。